

* これは実際の試験問題ではありません。
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. ICU は机が小さいので、狭いスペースで問題を解く練習するといいかも。
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 30 の問い(1-30)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があってから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

悲劇について

「悲劇」という言葉は、文学用語である。北村透谷の造語であると言われている。明治の半ばのころ初出の言葉であるが、その後、間もなく意味が移りひろがって、「悲哀なる人事」(明治44年の『辞林』の定義)、すなわち人生に起こる悲惨な出来事の意味として使われるようになってきた。昨今では、新聞やテレビジョンで、悲劇という言葉が、ますます軽く使われるようになってきている。「理由なき凶刃が胸に、善良な市民の悲劇的最期」「史上初のデッド・ボールによる死 - レイ・チャップマンの悲劇」、あるいは「あの飛行機墜落事故から多くの悲劇が生まれた」というような報道が、しばしばなされている。英語の「悲劇(tragedy)」の場合でも同様である。16世紀にすでに、人生での突然の惨劇の意、不幸な出来事の意味が加わっている。それはそれでよい。だが、悲劇という文学用語の厳密な定義、とまでゆかなくとも、本来の意味までも、ぼやけて曖昧になり誤解されてきているようだ。悲劇と聞くと、ただひたすらつらい悲しい筋の劇、最近の小、中学生の表現での「メチャくらい」「チョウみじめ」な話の劇だと、これまたいとも気軽に考えられているようである。私には、そこが気になる。悲劇とは、そんな軽いものではない。悲劇とは、そもそも人間とは何か、という重い問いを問いかける役割を担うものなのである。そこで、その重い役割が、どのように担われているかという問題を考えつつ、悲劇の意味を明確にしておきたい。

紀元前3000年に悲劇の例がエジプトに存在していた可能性もあるが、西欧の文学にとつての悲劇はギリシャに始まる。実は、"tragedy"も、ギリシャ語の「トラゴーイディア(山羊の歌)」からくる。この悲劇という様式は、葡萄酒の神ディオニュソスに捧げられた、葡萄の収穫祭で合唱隊がうたう歌、またそれとともに、収穫し熟成させた葡萄酒を初めて飲む際の儀式やその宴会での合唱、を原型とするものであった。合唱隊が山羊の皮をかぶっていたのでトラゴーイディアになった、とも言われている。悲劇は、紀元前5世紀にアテナイを中心に発達していった。合唱隊のひとりによる独唱がはいるようになり、その独唱と合唱とのやりとり、あるいは単独の俳優のせりふと合唱隊とのやりとり、やがてふたりの俳優の対話がいり、さらに俳優が三人になり、合唱よりせりふが重要になるなど、次第に演劇の構造を備えるようになってくる。そしてアイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスの三大悲劇作家が登場し、アテナイは悲劇の全盛期を迎える。その時期に、いわゆる悲劇の源流が見出されるのである。

悲劇の重い役割を知るためには、源流としての悲劇とは何かを問う必要がある。そのためには、まずアリストテレスが『詩学』のなかで特に注目し、賞賛しているソフォクレスの『オイディプス王』を取り上げ、悲劇とはどういうものかを考えなければなるまい。

オイディプスは、無意識の世界で男性が父を憎み、そして母を愛し独占しようとする願望を意味する精神分析の用語、エディプス・コンプレックスとしてよく知られている。その用語の出所が、この悲劇である。

—

テーバイの王ライオスは、やがて生まれる息子に自分が殺されるとの神託を受ける。息子が生まれた。王は、その嬰兒のくるぶしに穴をあけ金のピンで足を貫いて、テーバイの羊飼いに、キタイロン山に捨てさせた。慈悲心のある羊飼いは、捨て子を殺さずにコリントスの羊飼いに漬す。さらにその子は、子どもに恵まれなかったコリントス王ポリュボスに差し出され、王子として育てられた。その王子は、かかとが腫れていたため「オイディ（腫れた）プース（足）」と名付けられたのであった。

年月は流れた。ある酒宴の席でオイディプスは、友にからかわれ、自分がコリントスのポリュボス王の実子ではないと言われる。話を聞いて悩んだ王子はアポロンの神託所へ赴く。そこで、「故郷に帰るな。帰れば父を殺し、母と結婚することになる」という神託を与えられた。すぐさま、その足で王子は旅に出た。旅の途中、三叉路ですれ違ったテーバイの王の従者との間で争いが起き、オイディプスは、三人の従者とともに、ライオスを王とは知らずに殺してしまう。ひとりは逃げて助かった。それがキタイロンの山に幼児を捨てるように頼まれた羊飼いであった。従者はテーバイに戻り、国王は山賊に殺害されたという悲報を届けた。数日後オイディプスは、テーバイにくる。都は怪獣スフィンクスに苦しめられているところであった。「四本の足、二本足、三本足で歩く者は誰か」という謎をかけ、解けない者を毎日喰い殺していた。オイディプスは、謎を解いてその怪物を追い出したのであった。そこでこの英雄は、テーバイの新王に迎えられた。そして王妃イオカステと結婚する。二人の間には二男二女が生まれた。

15、6年もの間穏やかだったテーバイに、危機が訪れた。疫病が蔓延している。果樹も病害に襲われている。デルポイの神託により、先王の暗殺者が、都に住んでいるためであるとわかる。都を救うには犯罪人を殺すか、国外に追放しなければならない。先王殺しの犯人追求のため、予言者ティレスイアスが呼び出される。問いただされて王妃も、先王殺害の事情を話す。どの話も真実を指し示していた。そこへ、コリントスから使者がきて、ポリュボス王が死去したと報じ、王子オイディプスに帰国を促す。オイディプスはアポロンの神託を思う。母親がまだ生きている故郷へは戻れない。使者はこう答える。あなたはポリュボスの子ではない。実は、テーバイの羊飼いから頼まれた私の養子だった。そのあなたを、子に恵まれなかった国王が引き取ったという、いきさつがある。だから心配はいらない、と。すると突然、王妃イオカステは奥へ引っ込む。そこへ使者にオイディプスを

渡した老羊飼いがくる。真実が明るみに出る。オイディプスは宮殿内へ向かい駆ける。すでにイオカステは首を吊って死んでいた。オイディプスは、彼女のブローチで自分の両眼を刺す。これからは、叔父のクレオンがテーバイの国政の責任を担う。

以上、この悲劇の背景、そして大まかな筋を述べた。ところで、戯曲を論ずる者は、また、かりそめにも深刻な文学作品を創作しようと、あるいは批評しようと志す者は、アリストテレスの『ペリ・ポイエーティケー（創作について）』を、その活動の出発点に置いているものである。少なくともこの著作を意識しているはずである。製作すること、創作すること、詩作、そして一篇の詩が、みな「ポイエーシス」という単語で表わされる。そして、「ペリ」は「何なにについて」であり、「ポイエーティケー」とは「ポイエーシスにかかわる術」という意味である。それゆえこの著作は「創作について」で、通常『詩学』と訳されている

そこで展開されている悲劇論は、悲劇の本質を突いている。まず、悲劇とは、喜劇と異なり、すぐれた人物の厳粛な、大きな行為のミメシス（再現して見せる描写、模写）である。そしてその再現は、エレオス（痛ましさ）とポボス（恐れ）を通じて、そのようなパターマタ（受難、そして感情）のカタルシス（排泄浄化作用）を達成するというものである。特に『オイディプス王』には、すぐれた悲劇に必要なアナグノーリシス（認知）とペリペテイア（逆転）の要素があり、またさらに、ここでは認知と逆転が同時に起こるといふ見事さがあることを、アリストテレスは指摘している。その指摘もあって、悲劇の重要な要素がすべて揃って現われている『オイディプス王』は、後世になって悲劇の原型と見なされるようになるのである。

二

認知とは、いままで無知であったがいま真実はこれだと知った、という段階への認識の変化、いわば実在への覚醒、真実の発見である。『オイディプス王』では、長い年月、賢者として国を治めてきたオイディプスが、自分こそ先王の実子で殺害者、妻は実母であるという真実を認知する。その真実を発見する。この発見は、同時に自己が完全に否定されてしまうという暖間である。その瞬間にいたるまでに、真実への覚醒を促す、さまざまな暗示があった。いま、それらが、人生の営みの表面のみを見てはならない、奥にある真実を見抜くようにという、自分自身への呼びかけの声だったのだとわかる。疫病を食い止めるための犯人探索に努力することが、自己を国王の座から降ろして国外へ追放する結果をもたらす。目的成就により、幸福ではなく、不幸になる。この皮肉が、「悲劇の皮肉」である。あまりにも鮮やかなので「ソフォクレス風の皮肉」と呼ばれるようになったものである。真実の認知は、自分には自己の真実を見る眼がなかったということの発見である。人

間とは、眼があって視力があって、しかも、ものが見えていない、そんな者なのだという認知である。ものが見えていると思っていたときの自己過信が皮肉である。そして、眼が見えていた状態からの逆転、それは失明である。

観客は、オイディプスが両眼を突くという行為から、悲劇の要素として重要な、苦痛と恐怖のパターマタを喚起される。この上ない痛ましさと恐怖を経験する。受難の実感を主人公とともに共感する。むろんそこには、真実の発見と逆転がある。その前に、コリントスからの使者が、王を喜ばせようとして、アポロンの神託への恐れから解放しようとして、オイディプス王の過去を明かしていた。事態はかえって反対の方向へと進展しだすのを感じていた。あの時の不安感をさらに超える痛ましさを、ここで改めて感じているのである。王の幸福は、ここで、不幸へとまさしく逆転していた。もはや運命に逆らえないと知ることからくる苦痛があり、運命の時が迫るのを感じる。それに恐怖が伴う。それが、エレオスとポボスのパターマタである。

オイディプスの痛ましく恐ろしい行為により、観客は苦痛と恐怖の感情を経験する。そしてその経験の激しさが、カタルシスを引き起こす。カタルシスとは、魂の浄化をもたらす感情の「排泄作用」の意である。この悲劇では、その作用はどんな内容のものなのであろうか。

あの恐ろしい行為の決意をするオイディプスは、すでに真実が見えないような肉体の眼などもはや不要だ、と知っていた。犯人がわからずにいたときは、こころの眼がなかった。自分を知りたくても知ることができないでいた。事象の表面しか見えなかったからである。それゆえ内面は不安に波立ち苛立っていた。心眼がなかったからである。いま、肉体の眼は視力を失っている。だがそれでよい。こころの眼が真実を認知しているから。いままでは、真実の世界からの呼びかけに気づいていなかった。いや、気づこうとしていなかった。だが、いま真実の発見自体が、無知から知への転換であり、逆転であると知っている。自分自身の本質も、人間のあるべき姿も、人間と人間を超越する世界との出会いの意味もよく見えてきたようだ。眼を捨ててそう思える。これでよいのだと思う。妻を失った。国王という地位も失った。それに伴う権力も財力も失った。が、こころはもはや乱されていない。いままで価値があると思っていたものが、いまや無価値になっている。自分で自分を罰することへ行き着いて、神々の世界の正しさを知った。幸から不幸へと運命づけられたオイディプス王は、もしかしたら不幸から幸への逆転を体験したのかも知れない。かねがね私は、悲劇が観客に激しい感動を喚起するのは、主人公の内面のこの逆転のゆえなのではなからうかと思っている。私たちは悲劇の主人公とともに、世俗の価値よりも、この世の - 切を超えた世界が見えること、そして胸のうかが穏やかであることのほうが、遙かに貴いのだ、と気づいて感動する。観客は最も悲惨なオイディプスを見て、このひと

にはもはや真実の世界との断絶がないと知る。このひとの内面の平安を知って、観る者自身のこころも平安になっている。いままで価値がないと知ってはいても、日常生活のなかでそれらに執着していた。しかしいまはその執着心を排泄できている。それができて自分によるこんでいる。この悲劇が自分にそれを可能にしてくれた。それがよくわかる。カタルシスの作用とは、そういうものなのである。

三

近代の悲劇でのカタルシスの場合は、どうか。ルネッサンス期の悲劇は、古典を重んじつつも、古典の形式と法則から離れて行った。古典劇では、時と場所と行為（筋）が一致すべきであった。すなわち劇は、一日の、一所での単一の行為で完結するというきまり、すなわち「三一一致」があった。しかしそれが重要視されなくなる。シェイクスピアも古典の戯曲の規則、典型には縛られずに創作をした。いわゆる四大悲劇のひとつ、1602年に出版登録が行なわれた『ハムレット』の場合を考えてみようか。これは復讐劇と言われている。英文学の名作、いや世界文学の傑作として読まれている悲劇である。世界のどこかで、ほぼ毎日、上演されている悲劇である。

日本では、1871（明治4）年の中村敬宇訳サミュエル・スマイルズ著『西國立志編』がシェイクスピアを初めて紹介した。そこには『ハムレット』からの引用がある。また、『新體詩抄』（明治15年）には、ハムレットの有名な「To be or not to be : that is the question : ,」で始まる独白が訳されている。さらに、^{かながきるぶん}假名垣魯文の翻案物、^{はむれつとやまとにしきえ}『葉武烈士倭錦繪』が明治19年に出た。そこで明治初期以来、これが最も有名なシェイクスピアの作品になっている。100年前とは違う現在、しばしば日本のシェイクスピアと称される近松門左衛門の『心中天の網島』の治兵衛と小春、そして夫を奪った遊女小春にまで義理を立て通そうとする貞節な女房おさんを知らなくとも、また『曾根崎心中』の徳兵衛とお初を知らなくとも、ジユリェットとともに死んだ口メオを知っている。あるいはまたハムレットの独白の「弱き者よ、汝の名は女なり」や「生きるべきか、生きるべきでないか、それが問題」は知っているという者は多い。ちなみに、『新體詩抄』に訳された「生きるべきか」の一節は、ふたりの翻訳者による競作になっていて、それだけこの独白が重要視されていたのである。書出しは、矢田部良吉の訳が「ながらふべきか但し又 / ながらふべきに ^{あらざる} 非 ^{ここ} か / 爰が思案のしどころぞ」で、つづいて^{とちやまゆざん}外山、^{まし}山訳は「死ぬるが増か生くるが増か / 思案をするハこゝぞかし」である。何とも時代がかっている。しかも外山訳では、このせりふの最後でハムレットが、オフィーリアに呼びかけるところは、「のうこれもうし美しの / おへりや殿よ ^{べん} 辨天よ」なのである。弁天様になるとは、オフィーリア殿も、あっと驚いたであろう。ここでは、「ニンフ (nymph)」の訳語が弁天なのである。この弁才天、もとインドの川の神で、音楽も司ると言われる。すると、歌を好む川の精霊のような美しいオフィーリアが弁天娘であって

も、私たちは驚くことはない。

さて、この悲劇『ハムレット』の筋はよく知られているが、ここでいま一度、粗筋をたどってみよう。

デンマークの国王ハムレットが逝去した。弟クローディアスが王位に就き、王妃ガートルードと結婚する。王子ハムレットは父である王の亡霊から、父がクローディアスに毒殺されたと知らされ、叔父に対する復讐の使命を与えられた。王子は、叔父が暗殺者であることを確かめた上で復讐を決行したい。そこで、旅役者に暗殺劇「鼠とり」を演じさせる。観ていた王は、動揺のあまり席を立つ。王子は、亡霊の言葉が真実だったと確信する。だが、すぐに復讐にとりかからない。王子は母と居間で話すのを立ち聞きしていた、恋人オフィーリアの父ポロウニアスを、王と取り違えて殺す。王は、危険人物ハムレットを英国へ送る。到着次第殺すべしと書かれた国書とともに、である。船が海賊に襲撃される。王子、単身で敵船に乗り移って戦う。帰国。その時すでに、オフィーリアは、恋人のところが離れたという苦痛に加え、父親がその恋人に殺されたという悲嘆に悩み、精神錯乱に陥り、ついには死んでいた。王子を殺そうとするクローディアスの企みによる、オフィーリアの兄レアーティーズとハムレットとの剣の試合。試合中、王子用の毒入りの酒をガートルードが飲み、また毒塗りの剣先きによって、レアーティーズもハムレットも死ぬ。だが死ぬ前にハムレットは後讐を果たす。折りしもポーランドから帰還の途次、惨事の場面を目撃したノールウェイの王子フォーティンプラスによる葬送で、この悲劇は終局になる。

四

この悲劇の冒頭、先王の亡霊が出現する。何か不吉なことが起こる前兆を思わせ、国家に不穏な空気が漂っていることを暗に示すかのようだった。なぜかこの国では、いま警備が厳しい。兵器工場などでは、週末の休みも返上して工員たちが大砲の製造のため働かされている。最近、外国からの武器の輸入も盛んである。私は、この場面には、妙に生々しく現代日本が描写されているような気がしてならない。何かが起ころうとしていた。ノールウェイからの侵攻の危機が迫っているようだ。デンマークは、平穏ではなかった。『オイディプス王』のテーバイを思わせる乱れが漂っている。国の乱れを正して国家を安定させることが、指導者に期待されていた。ドイツ留学から - 時帰国した王子ハムレットにとっての生きる意味は、国家の安定と秩序の回復に尽くすことであった。

国王が死んだあと、ひと月もしないのに王妃である母が叔父と結婚した。これはおかしい、と王子は思う。国にわるいことが起こる、と感ずる。王子は、「復讐せよ」と父の亡霊に命じられた。仇の犯人とは、最近、王妃つまりハムレットの母と結婚をした新王。亡

霊の言葉は、その男、つまり弟が以前から王妃と不倫の関係を結んでいたことを思わせていた。その母の子である自分とは何者か、という問題に新たに煩悶する。貞節を捨てる、近親相姦を犯すような母のことを考え、わが身も汚れていると思う。自殺をしたい。「天地には、ホレーショウよ、哲学では夢にも思いつかない、不思議なことが数多くあるのだ」と、王子は親友に述懐する。人生不可解なりと感じているのである。王子の様ざまな苦悩は、幾つもの有名な独白のなかに示されている。

デンマークの秩序の安定へのハムレットの責任感、さらにつよまる。「国家が腐っている」ようだった。国が汚れ時代が狂っているようだった。「時が関節をはずしてしまっている、ああ、呪われた時勢よ、私がこの関節を接ぎ直す役を果たすため、この世に生まれてきたとは。」王子はそう考える。「雑草がはびこったままの庭」に、「^あ鈍滓の浮いたこの時代」に生きる王子は、庭仕事をして世界の乱れを整理し、時代の関節をはめなおす、という自分自身に与えられた使命を自覚する。使命の内容は、まず復讐である。父親殺しの犯人を殺し、父の怨念を晴らすことが、国の秩序を回復する前提になった。それは乱れた自らの内面を安定させることでもあった。

ハムレット、フォーティンプラス、オフィーリア、レアーティーズそれぞれに対応する父と子の関係が、この悲劇で重要な主題である。たとえば、オフィーリアの悲劇は、父の命ずること、「王子の愛を拒め」に忠実に従ったことから、ハムレットの悲劇は父の命ずる「復讐せよ」に忠実に従ったことから、引き起こされたのであった。

ハムレットは、ある芝居のなかの、トロイの国王プライアムの最期を語るせりふが好きだった。トロイ戦争での英雄アキリーズの親友パトロラスはヘクターに殺され、ヘクターはアキリーズに殺される。そして、ヘクターの弟パリスが、弓で兄の仇アキリーズを殺す。ちなみに、この不死身のような英雄の唯一の急所がかかとであった。弓の傷をそこに受けたのが彼の死因だった。それで、「アキレス腱」なのである。この英雄の子ピッラスは父の仇を討たなければならない。そしてついにあの夜、敵国の王プライアムを殺すことで復讐を遂げた。その夜の描写が、「あの荒々しきピッララス (The rugged Phyrrius)」で始まるせりふである。「その黒ずんだ^{てん}貂の毛の色の鎧は、黒いそのころのよう、さながら夜に似て、呪われし木馬の腹にうずくまれり」一例の、機に臨んで変に応ずる才能の持主オデイスユース（つまりオデュッセウス）の考案した木馬の策略によって、さしものトロイの城も落ちたのであった。ハムレットは役者の朗読に聞き入る。ピッラスは復讐を遂げ、王が切り刻まれて死ぬ。王妃ヘッキュバの眼の前で。そのくだりで、感情をこめて朗唱する役者は、涙を流している。ハムレットは感じ入った。「ヘッキュバは、あの男にとって何なのだ、またあの男は彼女にとって何なんだ、涙を流さなければならないとは。」つまり彼、役者が虚構の話にあれだけ魂を打ちこめるのに、この私は、何ら行為をなしていない。自分の父が悪党のために生命と王位とを奪われたのに、また、その怨みを知らされた

のに、使命を忘れていないか、復讐への努力を何ひとつしていないではないか、と愕然とする。

このピッラスの場面は、この劇での主人公の転機を示す重要な個所である。その後、間もなく、ポーランドへ向かうノールウェイの先王の王子、現在の王の甥のフォーティンプラスの軍隊に出会う。ハムレットはここでも、同じく、深く感動する。何とフォーティンプラスはまったく価値のない、卵の殻ほどの土地のため出陣している。名誉のためなら一本の藁を手に入れるためでも出陣してよいと思っている。その場面もまた、主人公に、復讐という使命を遂行すること自体が重要なのに、お前は何ひとつ行為をなしていないではないかと告げている。行為を引き延ばすのが、お前の本性なのではないか、と指摘しているのである。ところで、名せりふの多い『ハムレット』に、「ある人ひとりをよく知ること、それは自分自身を知ることとなろう」という一行もある。確かにそうだと思う。「ある人」とは、ある時代、ある場所、ある作品、と言い換えてもよい。私もまた、作品『ハムレット』を読むごとに、人間性の謎を新たに知り、そのため自分自身の本性がよりよくわかってくる気がしている。

ノールウェイ軍と遭遇したとき、ハムレットにとっての人生の目標は、いままでの怨恨の復讐からずれて、すでに別なものへと移っていたようである。いまハムレットはピッラスの復讐に感動しているのではない。フォーティンプラスのみなざる戦闘意欲に感動しているのでもない。復讐の成就と戦争の勝利への闘志に掻き立てられているのではなく、ただ当然の行為をするという、行為それ自体への促しを自覚しているのである。当然の仕事を精一杯やっている役者の姿、当然の道を生き生きと行進する軍を率いるフォーティンプラスの姿に感動しているのである。

ところが、自己の当然の行為をなすことに実際にとりかかろうとしたその時、王の側近ポロウニウスを殺してしまった。その過失により、ハムレットは、レアーティーズの父を殺したことになり、自分が今度は父親殺しの仇になってしまった。レアーティーズは、妹オフィーリアが発狂し自殺したことで、さらに王子を憎悪する。父の怨みを晴らしたいレアーティーズが、王に対し反抗の気配を見せる。その時、王は、自分をきみの味方だと思え、きみのため復讐を遂げさせようと言う。王としても、邪魔者ハムレットは消したい。陰謀を用いても消したい。自分自身の生命と地位の安泰を願うからである。だが、王は、レアーティーズよ、これは「お前自身の平和のため」なのだと言う。この劇で、‘peace’(平安、平和)という言葉が、最も皮肉に使われているのが、ここである。彼の復讐心を利用するクロードディアスは、いま、レアーティーズに、試合では違反になる先きの尖ったままの剣を持たせる、しかもその先きに毒を塗るまみにさせる。

クローディアスは、復讐の機会をうかがう甥が背後にいるのに気づかず、平安を求め罪を悔い祈ろうとしていた。しかし、ハムレットは叔父をその祈りの最中に殺害し、復讐を遂げることはできなかった。祈りの最中に死ぬならば、平安が与えられ、その魂は天国へ行く。地獄に引きずり落としたい相手を、天国へ送ることはできない。自分の父が、いまだに死後の世界で王子の復讐成就まで苦しんでいるのだ。ハムレットは父と自分のこころの平和を気にする。だが、レアティーズは、ハムレットとは違う。父殺しのかたきを見つけたならば、「教会のなかででも奴の咽喉をかき切ってやる」という復讐心に燃えていた。

そのレアティーズとハムレットは、最後の場面で和解し合うのである。「赦してくれ、レアティーズ、きみにはわかった」と言うハムレットは、「私のこころを解き放ってくれ (Free me)」と願っている。こころの自由とは、こころの平安である。いま、これが自分にとって最も大切なのである。そしてレアティーズの最後のせりふは、「どうか赦し合おうではないか、気高いハムレット / 私の死も、父の死も、あなたの罪にはならないように / それにあなたの死が、私の罪にならないように」であった。たとえ教会の中であれ、暴力を辞さぬ気でいたレアティーズが敵を赦せるように変わった。それゆえに、この悲劇で最も美しいせりふがこれであると観客には聞こえる。それに応えて、やはり死に瀕するハムレットは、「天がきみをその罪から解き放って下さるように」と祈る。いま、ハムレットのこころは、自由である。安らかである。復讐の繰り返しの虚しさを知って、神に罪を赦され、敵と赦し合うこと、それが生きることの真実の使命である。それが当然の道であると、ハムレットは知ったのである。

五

『ハムレット』での、犯人の確認も、やはり、アリストテレスの「認知 (発見)」である。ハムレットも、父を殺害した犯人を確認することへ、直進していた。ここでは叔父が犯人だった。クローディアスが犯人であると確信したとき、それまで向かっていた復讐の行為から彼は後退し逆行してゆく。その逆行が「逆転」である。復讐の使命は、むろん意識していた。だが、犯人を処罰する絶好の機会を逃した。むろん臆病のゆえではない。叔父の、父の、友の、自己の魂の行方を問題にする人間だからである。外国へ送られた。復讐からの逆行はさらに進む。しかしハムレットは、復讐から、こころの平安へ、国家の平和へと関心を深めていたのである。

そのように復讐から平安と平和へ関心が移ることの基礎には何があるのか。剣の試合の前、ハムレットは何か悪い予感を感じていた。だが王子は親友ホレーショウの、試合を断るべきという、忠告に対して、「前兆など気にしない。雀一羽落ちるのにも特別な摂理が

ある」と答えた。摂理とは神の意志、神の力と言い換えることができよう。敵と敵どうしが赦し合うことを祈るハムレットには、すでに天の絶対者との和解があった。神の意志との結びつき、神の力をその内面に感じている。だから、「覚悟こそがすべて (The readiness is all)」と言い切ることができた。用意ができて落ち着いていられること、それがこころの最も大切な基礎なのであった。

ガートルード、レアーティーズ、クローディアスそしてハムレットの死の場面は、アリストテレスのいわゆる「痛ましさ」「恐れ」の再現にほかならない。この場面を通じて観客は、こころの平安を胸にして死んでゆく主人公に感動する。内面の平安があるからこそ、外の政治の世界の平和を生み出すことができる。この悲劇の初めの場面で、父の仇を討ちたい若きフォーティンブラスがデンマークを侵攻しようとしていた。この悲劇の最後の場面で、いまわの際のハムレットが、デンマークの新王としてノールウェイの王子を推挙している。何と母国を外国に支配してもらおう、という申し出である。その寛大なこころに観客は感銘を受ける。和解のなかった二国間にいま平和が築かれるのである。こころの平安があるため、仇敵である個人との和解、敵国との和解が可能になるのである。この悲劇の主題はそこにある。私はいま、ゆくりなくも、ホメロスの言葉、「立派な男は、こころに必ず和解を心得ているものなのだ」(『イリアス』)を思い出している。17世紀のミルトンの悲劇『闘士サムソン』もまた、神と和解した英雄の死ののち、「平和 (peace) と慰め (consolation) /そしてこころの平安をもって、すべての熱情は鎮められて (And calm of mind all passion spent)」静かに終る。この悲劇について、ゲーテがこれほど古代人の精神をよく伝えている近代人の作品はほかにない、と言って絶賛していた。日常の生活で、自分の内面の不安を抱え、自分を傷つけた相手を許せないでいる観客も、悲劇の主人公の胸のうちの静けさのなかに、すべての感情が鎮められて、こころ安らかである。『ハムレット』のカタルシスとは、そういうものである。そのカタルシスをもたらす作品、それが本来の悲劇というものなのである。

次の問題(1 - 30)には、それぞれ a , b , c , d の答えが与えてあります。各問題につき、a , b , c , d のなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a , b , c , d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

- 1 . 悲劇という文学用語の意味について、かねて筆者の気に掛っている点は、次のうちのどれか。
 - a . 人間とは何かという主題の悲劇が主流になっている点である。
 - b . 人生における悲惨な出来事の劇と考えられている点である。
 - c . 気軽な話の劇まで含むようになってきている点である。
 - d . 筋が「チョウみじめ」ならば悲劇である、と思われている点である。

- 2 . 『オイディプス王』は、人間とは何者かを問う作品である。ここでは、人間のあるべき姿は、どのように考えられているか。
 - a . カタルシスとエレオスとポボスを追求する存在。
 - b . 不幸に直面し、それを幸へと逆転させ得る存在。
 - c . 自己過信ゆえ、自分自身を知ることができない存在。
 - d . 人間を超える世界との出会いの意味が見えない存在。

- 3 . アリストテレスが、悲劇の傑作として特に注目しているのは、ソフォクレスの『オイディプス王』である。その理由として最も適切なものはどれか。
 - a . 創作活動の出発点になる作品であるから。
 - b . 喜劇と異なり、すぐれた人物のミメシスであるから。
 - c . 悲劇に必要な要素がすべて現われているから。
 - d . エディプス・コンプレックスがテーマになっているから。

- 4 . 「痛ましく恐ろしい行為」(二の下線部)とあるが、そのオイディプスの行為とは、次のうちのどれに当るか。
 - a . 父を殺し、母と結婚したことである。
 - b . アポロンの神託に従ったことである。
 - c . 逆らえない運命にあえて逆らおうとしたことである。
 - d . 両眼を突いたことである。

5. 『オイディプス王』が後世になって悲劇の原型と見なされるようになったのは、どのような理由からか。
- a. ソフォクレス風の皮肉があるからである。
 - b. ミメーシスにエレオスとポボスが含まれているからである。
 - c. 「認知」と「逆転」が同時に起こっているからである。
 - d. デイオニュソスの儀式や宴会で合唱隊が歌うからである。
6. 悲劇における「認知」とは、何を意味しているか。
- a. 実在への覚醒、真実の発見である。
 - b. 運命の展開により明らかになった、法律上の身分の認知である。
 - c. すぐれた人物の不幸が幸へと「逆転」することのミメーシスである。
 - d. ますます真実が遠のいて行くという認識である。
7. 『オイディプス王』における「逆転」の意味として最も適切なものはどれか。
- a. オイディプス王が失明の恐怖におののくことである。
 - b. 『詩学』に記されている「排泄作用」である。
 - c. 無知から知、知から無知への循環である。
 - d. 真実を知ることによって、幸を不幸へ変えることである。
8. 筆者は、悲劇が観客に激しい感動を喚起するのは、主人公の内面の「逆転」のゆえではなかろうかと思っている。この「内面の逆転」とは何か。
- a. すぐれた人物の栄光からの没落である。
 - b. 「悲劇の皮肉」である。
 - c. 不幸が不幸でなくなる価値観の転換である。
 - d. 魂の苦痛と恐怖の体験である。
9. 『オイディプス王』におけるカタルシスの内容として最も適切なものは、次のどれか。
- a. 胸の内の苦悶を吐露できることである。
 - b. この世の一切を超えた、失われた世界を追求することである。
 - c. こころの平安を共感することである。
 - d. 世俗の価値を受け入れることである。

10. 古典劇のきまりである「三一一致」の意味は、次のどれか。
- a. 特にルネッサンス期の悲劇が用いた作劇法である。
 - b. アナグノーリシスとペリペティアとパテーマタの一致である。
 - c. 『ハムレット』に見られる、古典の規則の重視である。
 - d. ある一つの出来事が、ある日、同じ場所で起こることである。
11. 『ハムレット』の「オフィーリア」を「弁天」と訳したことについて、筆者の感じていることは、次のどれか。
- a. 賞賛している。
 - b. 驚いている。
 - c. なるほど当を得ている。
 - d. 時代がかかっていて、不適切である。
12. 主人公ハムレットは、‘To be , or not to be : that is the question:’という独白でも自分の苦悩を述べている。この主人公の苦悩に含まれないものは、次のどれか。
- a. 不貞の母の子としての肉体の汚れ。
 - b. クローディアスとの和解の難しさ。
 - c. 国家の秩序を再確立する使命。
 - d. 復讐を引き延ばしている自分のふがいなさ。
13. 『オイディプス王』のテーバイと、『ハムレット』のデンマークに共通する状況は、次のどれか。
- a. 警備の強化
 - b. 予期せぬ殺人
 - c. 秩序の回復
 - d. 混乱の危機
14. ハムレットは人生不可解なりと感じている。その理由として不適切なものは、次のどれか。
- a. 父の亡霊から聞かされた暗殺事件の真相。
 - b. 自分の哲学的思索の破綻による戸惑い。
 - c. 自分とは何かという問いを突きつけられていること。
 - d. 貞節な母が近親相姦を犯したという疑いによる煩悶。

15. ハムレットにとって、劇中劇「鼠とり」の持つ役割は、次のどれか。
- a. ハムレットが企てた復讐の再現。
 - b. ハムレットが秘める芝居好きの本性の発見。
 - c. ハムレットが自分の使命を再確認するための転機。
 - d. ハムレットが亡霊の言葉の真偽を確認する手段。
16. 筆者にとって、『ハムレット』を読むことの意義は何か。
- a. 古代人の精神についての理解を深めること。
 - b. 国家の秩序安定に貢献する義務を再認識すること。
 - c. 悲劇の本質を現代の目で見直すこと。
 - d. 人間の不思議さを考え、自分をより良く理解すること。
17. ピッラスの場面と、フォーティンプラスとの出会いの場面でのハムレットの感動は、どのような共通点をもっているか。
- a. 自己に与えられた当然の仕事をする以上への献身的意欲が促されること。
 - b. 復讐そのものというより、復讐への当然の行程の重大さを認識させること。
 - c. 自己の本性に従い、ただ当然の行為をすることの虚しさを確認させること。
 - d. 自分の使命を知り、当然の道を行くことの重大性を自覚させること。
18. クローディアスが、レアーティーズに「お前自身の平和のため」と言うのは、どうして皮肉なのか。
- a. 二人は、共に平和を憎悪しているから。
 - b. 実は自分自身の「平和」を願っているから。
 - c. 二人の不和を暗示する「悲劇の皮肉」になっているから。
 - d. ハムレットとの和解を願っているから。
19. 剣の試合に向かうレアーティーズの感情をよく表わすせりふは、次のうちのどれか。
- a. 「黒いそのころのよう、さながら夜に似て」
 - b. 「教会のなかでも奴の咽喉をかき切ってやる」
 - c. 「私のところを解き放ってくれ」
 - d. 「何なんだ、涙を流さなければならないとは」

20. レアティーズの最後のせりふが、観客にとって最も美しいと感じられるのは、なぜか。
- a. 死に源した時のせりふだから。
 - b. 変化そのものが与える感動があるから。
 - c. 罪の赦しを天に願っているから。
 - d. 宿敵と罪を赦し合うから。
21. ハムレットが、「覚悟こそがすべて」と言い切ることができた理由は、次のうちのどれか。
- a. 神の意志との結びつきを感じていたから。
 - b. ノールウェイをやがて征服する希望が見えていたから。
 - c. 剣の試合に勝つ絶対の自信があったから。
 - d. ホレーショウという友の信頼を勝ち得ていたから。
22. 『ハムレット』において、アリストテレスの言う「認知」と「逆転」は同時に起こっているか。
- a. 起こっている。
 - b. 起こっていない。
 - c. どちらとも言える。
 - d. 資料からは判断できない。
23. 『ハムレット』のカタルシスをとおして与えられる感情の意味として、最も適切なものは、次のどれか。
- a. 主人公の胸の内の静けさに共感し、諦観を与えられること。
 - b. 日常の不安な感情が鎮められ、こころの平安を与えられること。
 - c. 主人公の寛大な心に感動すること。
 - d. 和解を心得た立派な人間になる決意を与えられること。
24. 筆者は、オイディプスの悲惨さを知り、内面に平安が与えられることによって、観客のこころにどんな変化が起こると考えているか。最も適切なものを選べ。
- a. 生きる勇氣は真実の世界との断絶を見つめることから生まれる、という信念を持つこと。
 - b. 希望を持って社会の秩序に執着して生きていこう、という決意を持つこと。
 - c. 地位、名誉、権力などは価値がないものと知っていたが、日常生活の中で、それらに執着していたと気がつくこと。
 - d. 幸、不幸よりも、新しい生の原動力を知る方が、遥かに貴いことに気がつくこと。

25. オイディプスが両眼を突くという行動は、観客にどのような感情を喚起するか。
- 自業自得であるという認識による諦め。
 - 視力を失ったオイディプスへの同情。
 - 逆らい難い運命による痛ましさと恐れ of 感情。
 - この上ない苦痛と恐怖による神への怨念の感情。
26. ホメロスの言葉「立派な男は、こころに必ず和解を心得ているものなのだ」という言葉は、『ハムレット』における、どのような内容を含んでいるか。
- 自己の、個人の、そして社会の平和という主題。
 - ミルトンの闘士サムソンに似た勇姿。
 - ゲーテの言う、カタルシスによって鎮められる激情。
 - 自分を傷つけた相手への憎悪が苦痛となったこと。
27. 『ハムレット』は、通常、復讐劇と呼ばれている。そのような分類の仕方に対する批判のうちで、最も適切なものは、次のどれか。
- おさんの夫と、夫を奪った遊女への怨念がただよう『心中天の網島』の惨事同様、運命劇と呼ぶべきである。
 - 矢田部良吉などが感心したような、主人公の深い思索が中心となる、哲学劇と呼ぶべきである。
 - 主題の展開をたどると、和解劇と呼ぶべきである。
 - 登場人物の死は、すべて性格に原因があるので、性格劇と呼ぶべきである。
28. 筆者は、ハムレットの内面の安定が最もよく示されている場面を、次のどれと考えているか。
- 罪を悔いて祈る叔父を見逃す場面。
 - レアーティーズとの和解の場面。
 - ホレーショウに「前兆など気にしない」と言う場面。
 - フォーティンプラスに率いられる軍勢の姿に感動する場面。
29. 17世紀の悲劇のカタルシスと、ギリシャ古典悲劇の場合とを比較したとき、明らかになることとして、最も適切なものは、次のどれか。
- 内面の平静さを観客にもたらず、その作用が共通している。
 - 劇的効果は、「三一致」を守る場合に大きいことが共通している。
 - 近代の悲劇には、痛ましさと恐れ of 要素が希薄である。
 - 古典の悲劇のほうが、激情がより大きな鎮静効果をもたらす。

30 . この小論に副題を付けるとすれば、次のどれが最も適切か。

- a . 「認知」と「逆転」
- b . 苦痛と恐怖を超えて
- c . カタルシスの原型を求めて
- d . こころの平安